日本泌尿器科学会甲信越合同学術大会

(第 195 回信州地方会・第 101 回山梨地方会・第 390 回新潟地方会)

《 プログラム・抄録集 》

日　時：令和元年 6 月 8 日（土）13 時 30 分
会　場：ホテルオークラ新潟
　　新潟市中央区川端町 6-53　TEL 025-224-6111
参加費：3,000 円

※　参加受付は、12 時 45 分～
※　PC 受付は、13 時 00 分～
※　口演時間は、1 題 7 分。討論 3 分
　　(発表は PC のみです)

日本泌尿器科学会会員証を必ずご持参下さい。

951-8510　新潟市中央区旭町通 1 の 757
新潟大学医学部泌尿器科学教室内
日本泌尿器科学会新潟地方会
TEL：025（227）2289／FAX：025（227）0784
会長　冨田　善彦

13：30～13：35　　開会の挨拶

13：35～14：45

座長　中込　宙史（山梨大学）

1.　同一腎内に異なる組織型が存在した両側腎細胞癌の１例

新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院　泌尿器科[1)]、病理診断科[2)]、放射線診断科[3)]
長谷川素[1)]、村田雅樹[1)]、長谷川剛[2)]、池田洋平[3)]、原昇[1)]、中川由紀[1)]、西山勉[1)]

68 歳女性が乳癌検診時に偶然、両側腎腫瘍を指摘された。CT で右腎に径 7 cm、左腎に径 1.5 cmの多血性腫瘍を認め、腎細胞癌を疑った。MRI では両側腎腫瘍とも T2WI で軽度低信号、DCE-MRI で早期濃染の所見を認めた。両側腎細胞癌の疑いで、2019 年 1 月に腹腔鏡下右腎摘除術、左腎部分切除術を施行した。病理組織では右腎の主腫瘍は乳頭状腎細胞癌、pT3a で、右腎上中外側に径 10 mmの副腫瘍を認め、嫌色素性細胞癌、pT1a であった。左腎腫瘍は嫌色素性細胞癌、pT1a であった。

2.　帝王切開後出血性ショックで発見された嫌色素性腎細胞癌の１例

信州大学
雫田繕雅、上野　学、手塚雅登、井上貴浩、北原　梓、原　寛彰、鈴木　中、鈴木都史郎、道面尚久、永井　崇、皆川倫範、小川輝之、石塚　修

【症例】34 歳、女性。【現病歴】帝王切開後の出血性ショックのため搬送、出血は子宮動脈の破綻が原因と考えられ、動脈塞栓術が施行された。腹部 CT にて偶発的に腫瘍内出血を伴う右腎腫瘍を指摘された。【臨床経過】疼痛コントロールを行いながら血腫の吸収を待ち、右腎摘除術を施行した。病理診断は Chromophobe renal cell carcinoma, pT2a,N0,M0 であった。【考察】若年で出産を契機に発見された嫌色素性腎細胞癌の 1 例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

3.　膜性腎症の治療中に診断された PSA 正常の前立腺癌 D1 症例の１例

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
社本憲俊、澤田智史、須田遼祐、古屋良太、井上千尋、吉良 聡、神家満 学、三井貴彦
武田正之

【緒言】膜性腎症は悪性腫瘍を合併する。【症例】79 歳男性。膜性腎症治療中に画像検査にて右骨盤内リンパ節転移を伴う前立腺癌（cT4N1M0）を指摘、PSA：2.270ng/mL であった。経直腸的前立腺針生検にて GS 5+4 の腺癌で、去勢療法と前立腺および骨盤内リンパ節転移に 2Gy×24 回の根治的放射線治療を施行し、PSA 低下、膀胱出血も消退した。【結語】膜性腎症に合併した前立腺癌の１例を報告する。

4.　移植尿管-自己尿管端々吻合を施行した８例の検討

新潟大学医歯学総合病院　泌尿器科[1)]、順天堂大学　泌尿器科[2)]、大塚台クリニック[3)]
乾幸平[1)]、田﨑正行[1)]、齋藤和英[1)]、中川由紀[2)]、池田正博[1)]、高橋公太[3)]、冨田善彦[1)]

対象と方法：当院で行った腎移植症例の中で、移植尿管-自己尿管端々吻合、自己尿管結紮を行った８症例を後方視的に解析した。結果：移植時の平均年齢は中央値で 16.5 歳、生体腎移植 7 例、献腎移植症例 1 例だった。腎移植時に自己尿管との端々吻合を選択した症例は 2 例、移植後の尿管合併症で自己尿管に端々吻合をし直した症例が 6 例だった。2 症例で自己尿管結紮後の自己腎の水腎症による腹痛を生じ、自己腎摘除術を行った。考察：自己尿管結紮を行うことで、自己腎の水腎症の悪化による腹痛を生じる可能性があり、術式の検討を行う必要があると考えられた。

5.　超音波検査が血管内治療後経過観察に有効であった腎動静脈奇形の２例

信州大学[1)]、飯田市立病院[2)]
蜂谷　守[1)]、皆川倫範[1)]、中藤　亮[2)]、井　世奈[1)]、松林良祐[1)]、雫田繕雅[1)]、松本侑樹[1)]、原　寛彰[1)]、鈴木　中[1)]、鈴木都史郎[1)]、上野　学[1)]、道面尚久[1)]、小川輝之[1)]、山下俊郎[2)]、石塚　修[1)]

腎動静脈奇形の２症例を経験した。症例１は 76 歳女性で、他疾患の精査で行った CT で腎腫瘤を認めた。症例２は 83 歳女性で、右背部痛と血尿を認め、受診した。いずれの症例も CT で腎動静脈奇形と診断されたが、超音波検査所見が特徴的であった。また、いずれの症例も血管内治療後経過観察に超音波検査が有用であった。腎動静脈奇形の超音波検査所見をまとめた報告は少ないが、本症例では意義深い所見が得られたので報告する。

6.　高度前部尿道狭窄に対し二期的尿道形成術を施行した１例

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
古屋良太、須田遼祐、澤田智史、松田 結、深沢正成、井上千尋、吉良 聡、葛西義史、高橋宣弘、井原達矢、中込宙史、神家満 学、三井貴彦、武田正之

狭窄部位の長い高度前部尿道狭窄に対して、包皮及び陰嚢外側の皮膚皮弁を用いた二期的尿道形成術が有効であった一例を報告する。
38 歳の男性。尿閉を主訴に当院受診。画像及び内視鏡所見より外尿道口から球部尿道にかけて高度な尿道狭窄を認めた。狭窄部位が長いため、一期目は尿道の開放と包皮及び陰嚢外側の皮膚皮弁の尿道への縫合を行い、11 ヶ月後に尿道形成術を施行した。術後現在、良好な排尿状態が得られている。

7.　当院における軟部肉腫 13 例の検討

長岡赤十字病院　泌尿器科
晝間　楓、鈴木一也、米山健志

軟部肉腫は稀な疾患であり、また長期間無症状で経過することも多いためにしばし診断や治療に難渋する。中でも後腹膜や陰嚢内に生じた軟部肉腫は泌尿器科での治療が行われる。当科で 2007 年から 2018 年までに経験した悪性軟部腫瘍 13 例のうち、7 例が脂肪肉腫、4 例が平滑筋肉腫、2 例が横紋筋肉腫であった。それぞれの疾患的特徴や治療方針、予後について若干の文献的考察と共に報告する。

14：45〜15：45

座長　石崎　文雄（新潟大学）

8.　機能性副腎腫瘍との鑑別が困難であった後腹膜軟部肉腫の１例

虎の門病院
符　毅欣、萩原喜一、永本将一、矢野晶大、浦上慎司、岡根谷利一

症例：60 歳男性、高血圧、糖尿病治療中、10kg の体重減少、倦怠感と 38℃の持続する発熱の精査中に左後腹膜腔に径 15cm の腫瘍を認め、左腎に浸潤を認めた。貧血と耐糖能の悪化、CRP、カテコラミンおよびコルチゾール高値と IL-6 と TNFα上昇を認めた。機能性副腎悪性腫瘍として根治的左腎摘除・副腎摘除術を施行し、症状は改善した。病理組織は紡錘形細胞からなる肉腫であり、正常副腎・腎に浸潤していた。多彩な内分泌活性とサイトカイン産生を有する後腹膜軟部肉腫は稀であるが、その臨床像を報告する。

9.　TUEB 後に前立腺癌が発生した一例
―手術前後の前立腺癌の診断における考察―

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
佐藤 毅、井原達矢、矢野文彬、葛西義史、高橋宣弘、中込宙史、神家満 学、武田正之

前立腺肥大症に対する手術前においてPSAが高値を呈する症例は多く、前立腺生検後にTUEBなどの経尿道的手術を行うことが一般的である。今回、手術前に頻回に前立腺生検を行い、悪性所見が無い事を確認の上TUEBを行い、術後の病理でも悪性所見がなかったにもかかわらず、術後の経過観察中に短期間で前立腺癌が発生した一例を経験した。当院におけるTUEB症例の経過を比較し、手術前後の前立腺癌の診断に関して若干の文献的考察を加えて報告する。

10.　新潟大学における進行性腎癌に対するニボルマブの使用経験

新潟大学　腎泌尿器病態学分野
風間明、山名一寿、結城恵里、安楽力、石崎文雄、田﨑正行、丸山亮、笠原隆、冨田善彦

新潟大学における転移性または切除不能腎細胞癌に対する、ニボルマブ単剤療法の治療成績について後ろ向きに検討した。2016年9月から2019年3月の間に、21名の進行性腎癌患者がニボルマブ単剤療法を受けた。ニボルマブ投与開始時の年齢中央値は65歳（26-76）、観察期間中央値は10ヵ月（2-29）であった。無増悪生存期間の中央値は5.0ヵ月、全生存期間の中央値は未到達、奏効率は28.6%（CR 4.8%, PR 23.8%）であった。3例（14.2%）にCTCAEグレード3の免疫関連有害事象を認めた。

11.　尿管異所開口を伴う右腎低形成に対し腹腔鏡下右腎摘除術を施行した20代女性の1例

信州大学
松林良祐、松本侑樹、鈴木　中、北原　梓、鈴木都史郎、皆川倫範、小川輝之、石塚 修

21歳女性。幼少期より持続する尿失禁を主訴に前医受診した。造影MRIで右腎低形成と右尿管異所開口の可能性を指摘され治療目的に当科紹介された。DTPA腎シンチでは右腎への集積は認めなかった。尿失禁の原因は腟前庭部への右尿管異所開口と考えられ、右腎は無機能な低形成腎のため腹腔鏡下右腎摘除術が施行された。右腎は不完全重複尿管を伴っていた。右尿管切断部からガイドワイヤーを挿入して腟への開口を確認したが、詳細位置は不明であった。重量7g。尿失禁は改善し退院した。本症例の経過に若干の文献的考察を加え報告する。

12.　ロボット支援腎部分切除術後に無気肺および縦隔気腫を認めた2例

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
矢野文彬、葛西義史、高橋宣弘、井原達矢、吉良 聡、中込宙史、澤田智史、神家満 学、三井貴彦、武田正之

症例1は、71歳の女性で左後腹膜到達法によるRAPNを施行。術中にPaCO2の上昇を認めたが、バイタルは安定していたため手術は続行。術後のレントゲンで右無気肺、CTで縦隔気腫を認めた。症例2は、74歳の男性で左後腹膜到達法によるRAPNを施行。術中はトラブルなく終了したが、術後に右無気肺および縦隔気腫を認めた。RAPN後の縦隔気腫の報告は少なく、文献的な考察を加えて報告する。

13.　術前カテコラミン高値を呈した後腹膜脂肪肉腫の１例

県立がんセンター新潟病院 泌尿器科
山口 峻介、斎藤 俊弘、村田 雅樹、小林 和博、谷川 俊貴

症例は、55 歳男性。咳嗽、右側腹部痛を主訴に前医を受診。CT にて右後腹膜に 16cm 大の腫瘍を認め、当科を紹介初診。産生蓄尿検査にてカテコラミン高値を呈したため、褐色細胞腫の除外と組織確定のために、エコーガイド下経皮的腫瘍針生検を施行した。組織診断は脱分化型脂肪肉腫であり、遠隔転移を認めなかったことから、根治目的に腫瘍摘出術を施行し、術後経過良好にて退院。現在、外来にて経過観察中である。本症例について、若干の文献的考察を加えて報告する。

［　休憩　15：45〜16：00　］

16：00〜17：10

座長　上野　学（信州大学）

14.　尿路上皮癌に伴い血小板減少を来した１例

信州大学

井　世奈、上野　学、雫田繕雅、大池　洋、鈴木智敬、手塚雅登、原　寛彰、鈴木　中、

鈴木都史郎、道面尚久、永井　崇、皆川倫範、小川輝之、石塚　修

症例は 85 歳、男性。血尿、血小板減少を認め、精査にて右腎盂癌と診断した。ステロイド投与にて血小板数は上昇し、右腎尿管全摘除術を施行した。術後ステロイド投与中止後も血小板数の減少はみられなかったが、術後 3 か月で血尿、血小板減少を認めた。CT で肝転移、リンパ節転移が出現していた。ステロイド投与で血小板は上昇、現在化学療法中である。悪性腫瘍と血小板減少に関して、文献的考察を加え報告する。

15.　転移性腎癌に対しスニチニブ投与中に発症したフルニエ壊疽の１例

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
葛西義史、神家満 学、高橋宣弘、井原達矢、吉良 聡、中込宙史、澤田智史、
三井貴彦、武田正之

症例は 61 歳の男性。長期透析患者で、右腎癌・リンパ節転移に対して腎摘出後、2 年間スニチニブの投与を受けていた。肛門周囲の疼痛を主訴に近医を受診し、陰部・下腹部から臀部にかけて発赤腫脹と握雪感を認め、CT 検査では同部位に一致して高度な炎症と気腫像を認めた。フルニエ壊疽の診断で当院紹介となり人工肛門造設術及び広範囲の壊死組織切除術を施行した。スニチニブの抗 VEGFR 作用がフルニエ壊疽の発症に影響したと考えられた一例を報告する。

16.　カルバペネム耐性大腸菌による起因された急性前立腺炎

亀田第一病院
ビリーム　ウラジミル

本邦では、カルバペネム耐性腸内細菌科（CRE）感染はまだ稀である。海外旅行や東南アジアの労働者が増えるにつれて、泌尿器科でもこれらの患者さんと遭遇する機会が増加すると思われる。

60 歳代の男性は数週間前に夫婦で東南アジアへ旅行し、現地で胃腸炎症状が出現し、地元の医療機関で経口の抗生剤を短期コース投与された。帰国後、下痢、腹痛など症状はなかった。発熱、頻尿、排尿痛の主訴で当科に紹介となった。受診時に血圧 70 台で、炎症反応は上昇し、膿尿、細菌尿は高度であった。急性前立腺炎と診断し、MEPM1.5g/day 開始後、速やかに解熱し、炎症反応は軽快した。尿培養の結果はカルバペネム耐性大腸菌、NDM 遺伝子（New Delhi Metallo-β-lactamase）を認めた。炎症反応は陰性化し、尿所見は異常なく、蓄尿、排尿症状はなかった。臨床的に寛解がえられ、感染症の兆候がなく、退院された。

泌尿器科領域で多剤耐性大腸菌による感染症の疫学、診断、治療を考察する。

17.　膀胱 carcinosarcoma の 1 例

伊那中央病院
小川典之、上垣内崇行

57 歳、男性。肉眼的血尿にて近医より当科紹介となった。膀胱鏡にて膀胱内を占拠する非乳頭状腫瘍を認めた。造影 CT では 80mm 大の膀胱腫瘍を認め、壁外浸潤や転移を疑う所見は認めなかった。TUR-BT 施行の結果、143g の腫瘍組織を切除した。病理組織学的検査では、小細胞癌および少量の腺癌の成分と紡錘形肉腫の混在を認め、膀胱 carcinosarcoma と診断した。筋層浸潤の有無ははっきりせず。Second TUR を施行した結果、悪性所見は認めなかった。追加治療は行わず、現在外来にて慎重に経過観察中である。

18.　下部尿管結石に対して膀胱尿道鏡による治療を行った 1 例

山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
須田遼祐、吉良 聡、古屋良太、井上千尋、澤田智史、神家満 学、三井貴彦、
武田正之

小児の結石罹患率は成人と比べて低いが、その特殊性から結石治療は高度な技術や慎重な判断が求められる。小児の上部尿路結石の破砕法では ESWL または TUL が推奨されているが、個々の症例で治療法を検討する必要がある。今回我々は、小児の下部尿管結石に対して経尿道的 Ho:YAG レーザー破砕が有効であった症例を経験した。症例によってはレーザーや内視鏡を含むデバイスの選択と鏡視下砕石術に習熟した医師による砕石も、積極的治療として支持されると考えられた。

19.　術前に尿膜管遺残を疑った臍部子宮内膜症の 1 例

柏崎総合医療センター泌尿器科
羽入修吾、長谷川素、池田多朗

41 歳女性。1 年半前から臍部に腫瘤と痛みを自覚し整形外科を受診した。MRI で尿膜管遺残と診断され、当科に紹介された。腫瘤は臍窩の右下から中央にかけて球状に張りだし、表面平滑で皮膚に被われ、弾性硬。MRI では腫瘤は被膜を有し、直径 16 ㎜、内部は不均一で腹膜に接していた。全身麻酔下に腫瘤を切除し、臍窩の形成も行った。病理診断は子宮内膜症で、断端に内膜組織はなく、完全に切除されていた。経過は順調で再発はない。

20. 高度排尿障害を来した小児BXO（閉塞性乾燥性亀頭包皮炎）の経験

長野県立こども病院
岸蔭貴裕、市野みどり、大澤絵都子

13歳男児。反復性尿路感染、両側水腎症の精査加療目的に当院紹介。数カ月前から尿失禁が出現し、US では膀胱壁の高度な肥厚・不整を認め、UFM では著明な尿流低下を認めた。Video-UDS にて低コンプライアンス膀胱、BXO による下部尿路通過障害と著明な高圧排尿・VUR を認め、環状切開術を行った。術後、尿流は改善し両側水腎は消失、膀胱の壁不整も改善傾向にある。尿路感染を来す症例への病態把握には、尿路全体の精査が必要である。

地方会終了後共催セミナーが予定されています。

甲信越 Urology Front Line Seminar

拝啓　先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
　この度、甲信越 Urology Front Line Seminarを下記内容にて開催することとなりました。
つきましてはご多忙中とは存じますが、是非ともご参加下さいますよう、お願い申し上げます。
敬具

日 時：2019年6月8日(土)17：20 ～ 19：00

会 場：ホテルオークラ新潟４階『コンチネンタルルーム』
住所：新潟市中央区川端町6-53　TEL　025-224－6111

情報提供　『 イクスタンジ錠40mg・80mg 』　アステラス製薬株式会社

◆Expert Lecture ❶　17：30～18：15

座長　信州大学医学部　泌尿器科学教室
教授　石塚　修 先生

『 進行性前立腺癌に対する放射線外部照射療法の最前線 』

演者　京都大学大学院医学研究科　放射線腫瘍学・画像応用治療学
教授　溝脇　尚志 先生

◆Expert Lecture ❷　18：15～19：00

座長　山梨大学大学院総合研究部　泌尿器科学講座
教授　武田　正之 先生

『 ホルモン感受性進行前立腺癌に対する治療選択 』
～One size does not fit all～

演者　産業医科大学医学部　泌尿器科学
教授　藤本　直浩 先生

＊会終了後、情報交換会の場（4階 白鳥の間）を御用意しております。

主催：アステラス製薬株式会社